旧日本陸軍悪玉の第三弾

「インパール作戦」 (昭和 19(1944)/3～/7)

令和５年５月６日
横浜歴史研究会
古谷　多聞

<はじめに>

我は令和３年７月例会で旧日本陸軍悪玉の代表例として「シベリア出兵」・「満洲事変=満洲国の建国」・「二・二六事件」・「盧溝橋事件」・「日独伊三国同盟締結の推進」・「ノモンハン事件」・「インパール作戦」を挙げ、うち「シベリア出兵」「ノモンハン事件」ではその**大罪・悪行・愚行**等を既に例会で糾弾しており、今回はその第三弾「インパール作戦」である

「インパール作戦」は当時現地第 15 軍司令官**牟田口廉也中将の独断主導による無謀強硬な作戦**、そして彼個人的な特異な性格.功名心等が相俟って英軍に惨敗　然も敗戦退却時には多数の犠牲者(主に戦病死・餓死)を出す悲惨な「**白骨街道**」の現出で「**史上最悪の作戦**」と酷評され、敗戦の元凶を牟田口将軍一人に帰しているのが通説である
近時この通説に対し「敗戦の責を牟田口将軍一人に決め付けるには問題があり」との見直し論が台頭し、我も諸文献資料参考書等により「作戦発動までの底辺には日本陸軍否日本人固有.特有の体質・精神構造が潜在しているのではないか?」との疑念を抱き、今回は「作戦構想の原案、作戦発動までの経緯、及び旧陸軍の体質を明らかにする事で牟田口将軍独断の作戦発意の通説」にメスを入れ、旧陸軍の悪しき体質を毎回同様各種参考文献資料を孫引する従来方式を踏襲、更にその上面だけを我の独断.独善.偏見.拘り等の魂を組み込み記述するものである

尚本作戦の核心である「牟田口将軍の特異な性格・敗戦の因・白骨街道・責任の所在等」については次回の続編に持越とし、時間に余裕が有れば「我の独り言!」としてウクライナ情勢の第二弾も話題と致したい

第15軍首脳及び幕僚(前列左より柳田元三中将、田中新一中将、牟田口、松山祐三中将、佐藤幸徳中将、二列中央小畑信良少将)

牟田口廉也中将

Ⅰ.「インパール作戦」(昭和19(1944)/4～7)とは　<要約>

太平洋戦争末期　日本軍が英国領インド北東部の英印軍根拠地であるインパール攻略を目指した作戦で南太平洋ガダルカナル島の戦いと共に太平洋戦争で最も凄惨な戦いで且つ敗戦の代表例である

作戦の目的は

戦略的には①日本は南方資源地帯確保の為ビルマを「大東亜共栄圏の西壁」と位置付しビルマ防衛の攻勢防御を図り、連合国軍の反攻を阻止

②援蒋ルートの遮断

政略的には①戦局悪化の打開策、国民の戦意高揚を図る東條英機首相の思惑

②インド独立を目指すチャンドラ・ボースの自由インド仮政府支援等　である

昭和19(1944)/3作戦開始し目的地インパール付近まで到達するが、現地第15軍司令官牟田口廉也中将の無謀強硬な戦術は火器.兵站補給不足が露呈　然も英印軍の反撃に遭い進撃は頓挫し同年7月作戦は中止その敗走中に多大な犠牲者(主に戦病死.餓死)を出し「白骨街道」の現出で「無謀.史上最悪の作戦」と酷評され、補給無視の作戦計画.戦闘能力の過信.英印軍戦力の過小評価等によるこの作戦は日本軍の作戦指導の硬直性が露見し、結果的にはビルマ防衛戦の全面的崩壊を齎した

<無謀強硬な戦術:インパールまでの行軍>

①距離　約300～340kmの徒歩行軍による奇襲突破作戦=「鵯越戦法」

(例)インパールを岐阜、コヒマを金沢と仮定すれば・・大田喜弘著から転記

第31師団:軽井沢付近➡浅間山(2452m)➡鹿島槍ヶ岳(2890m)➡高山➡金沢(コヒマ)　約340km

第15師団:甲府付近　➡槍ヶ岳(3180m)➡駒ヶ岳(2996m)➡岐阜(インパール)　約310km

第33師団:小田原付近➡岐阜(インパール)　約300km

第15軍司令部:仙台　兵站基地:宇都宮　に相当

②地形　大河チンドウィン河を渡河　ビルマインド国境の標高2～3000mが連なるアラカン山系を踏破ジャングル地帯はマラリア.赤痢等が蔓延する悪疫瘴癘の地

③携行　道路は未整備で自動車による補給搬送は困難の為、兵員は一人約30～60kgの重装備と火器類を携行

④糧食　3週間分を携行・・作戦開始:3/8で3週間分の糧食を携行

攻略目途:4/29の天長節(昭和天皇誕生日)で作戦期間は約8週間

➡3週間と8週間のgap?　・・「糧を敵に求める」で対応

<関連文芸作品>

1.「ビルマの竪琴」竹山道雄著:「赤トンボ」(童謡雑誌)に昭和22/3～23/2掲載

2.「エール」(NHK朝ドラ)　:古関裕而　陸軍特別報道班員としてビルマに派遣

3.「戦場にかける橋」(映画)　:泰緬鉄道建設に関連し捕虜収容所での人間の尊厳.名誉　戦争の惨めさを描写　1958年アカデミー賞(作品.監督.脚色.主演男優)受賞

<関連人物>

1.塚本幸一(ワコール創業者)　:第15師団歩兵第60連隊に所属し本作戦に従軍

2.吉原正喜(巨人軍捕手)　:本作戦に従軍後ビルマ国内を転戦し同地で戦死

熊本工では川上哲治と同期　巨人軍ではスタルヒン.沢村栄治の女房役

現役時代の背番号"27"は歴代名捕手(森昌彦.大矢明彦.伊東勤.古田敦也.谷繁元春等)の定背番号　昭和53年野球殿堂入り

3.大松博文(バレーボールの指導者・1964東京五輪女子バレー金メダル獲得の監督)

:第31師団独立輜重第55中隊に所属しコヒマの戦いに従軍

Ⅱ.太平洋戦争 真珠湾攻撃からインパール作戦までの戦況

昭和 16 年=1941 年・昭和 17 年=1942 年・昭和 18 年=1943 年・昭和 19 年=1944 年・昭和 20 年=1945 年

年月日	太平洋戦争全般	年月日	インパール作戦関連
16/12/8	日本海軍　真珠湾攻撃		
		17/1/15	日本軍　ビルマ攻略開始
		2/15	日本軍　シンガポール攻略 ・・牟田口将軍の武勲
		3/9	日本軍　ラングーン占領
17/6/5	ミッドウェー海戦	5/10	日本軍　ビルマ全土制圧
6/7	日本海軍　惨敗 **➡太平洋戦争海戦の turning・point**	8/5	南方軍　「インド東北部に対する防衛地域拡張に関する意見」を具申
8/7	米軍　ガダルカナル島に上陸	8/22	参謀本部　南方軍に「東部インド作戦準備に関する指示」を示達 ・・「二十一号作戦」
		9/1	南方軍　第 15 軍に「二十一号作戦」の準備命令を伝達
		12/23	参謀本部　「二十一号作戦」保留決定
18/2/1	日本軍ガダルカナル島から撤退開始 **➡太平洋戦争陸戦の turning・point**	18/3/18	牟田口廉也中将（第 18 師団長）第 15 軍司令官に昇任
		3 /27	緬甸方面軍創設(軍司令官河辺正三中将)
4/18	山本五十六聯合艦隊長官戦死 **➡日米軍攻守逆転　日本軍守勢一方**		➡河辺.牟田口コンビ復活「**二十一号作戦**」**再浮上**
		8/1	日本軍占領下でビルマ独立
5/12	米軍　アッツ島上陸 5/29 日本軍玉砕	8/7	南方軍　緬甸方面軍に「ウ号作」=インパール作戦」準備指示命令
7/29	日本軍　キスカ島から撤退		
		10/21	チャンドラ・ボース首班の自由インド仮政府樹立　10/24 日本承認
		11/5	大東亜会議:日本.満洲国.中国南京政府.タイ.ビルマ フィリピン.自由インド政府
11/25	タラワ.マキン両島の日本軍玉砕		
		12/25	泰緬鉄道開通
19/2/17	米軍　トラック島(聯合艦隊根拠地)を強襲➡米軍次の目標はサイパン島	19/1/7	**参謀本部　インパール作戦を発令** :「大陸指第 1776 号」
2/21	東條英機首相陸相　参謀総長を兼任	3/8	**インパール作戦行動開始**
		4/6	日本軍　コヒマ占領
		4 /中旬	日本軍　インパールを包囲
6/15	米軍　サイパン島上陸作戦開始	6/23	英印軍　インパール日本軍包囲陣を突破
7/7	サイパン島日本軍守備隊玉砕	7/4	**参謀本部　インパール作戦中止を決定**
7/18	東條英機内閣総辞職	7/9	日本軍　撤退開始
20/3/10	東京大空襲	20/3/27	ビルマ国内で反日武装蜂起発生 (主導者:アウン・サン将軍)
5/29	横浜大空襲	4/23	緬甸方面軍司令部　隷下兵団.日本人居留民を放置しラングーンから逃避
		5/3	英印軍　ラングーンを奪回

Ⅲ.「インパール作戦」構想の原案から発動まで・・牟田口廉也将軍独断の発意の Antithese

1.構想の発意・発想は=陸軍中央部首脳(東條英機首相兼陸相.杉山元参謀総長等)
　実行者は　　=第 15 軍司令官司令官牟田口廉也中将　但しその戦術には多々の問題点があり、
　　「敗戦の元凶」である事には紛れもない事実である

①太平洋戦争開戦前から陸軍首脳部の間には**インド進出の作戦構想**があり
　参謀本部第八課(謀略課)参謀某中佐の証言
　　:「昭和 15 年秋頃　杉山元参謀総長談『ビルマと同様**インド工作の方も宜しく頼む**』」

②昭和 16/11/15　大本営政策連絡会議「対米英蘭蒋戦争終結に関する腹案」
　　(要旨)日独伊三国協力し先ず英国の屈伏を図る
　　ⅰ**豪州印度に対し攻略**及び通商破壊等手段に依り、英本土との連鎖を遮断し其の離反を策す
　　ⅱビルマの独立を促進し其の成果を利導して**印度の独立**を刺激す

③昭和 17/3/3　「今後とるべき戦争指導の大綱」
　　:陸軍は**戦争指導の重点をビルマ.インド方面**とし，政戦略遂行に必要な手段を講ずる

④昭和 17/8/5　南方軍作戦主任参謀林璋中佐「**インド東北部に対する防衛地域拡張に関する意見**」を起案し、参謀本部に具申
　　(要旨)ⅰ英国の反攻を阻止　援蒋空路を遮断
　　ⅱ**対インド工作の発展**=独立支援を図る為、ビルマ.インド国境方面に航空基地の建設を推進
　　ⅲ**東部アッサム州(インパール方面)及びチッタゴン(インド洋方面)を攻略**

⑤昭和 17/8/22　参謀本部　南方軍具申を確認後、南方軍に「東部インド進攻作戦準備に関する指示」を示達:「**二十一号作戦**」と称し、行動開始時期は同年 10 月中旬(雨期終了後)
　　・・**「インパール作戦」構想の原点**

⑥昭和 17/9/1　南方軍　第 15 軍(軍司令官飯田祥二郎中将)に「二十一号作戦の準備命令」を下達

⑦飯田軍司令官「二十一号作戦」に困惑　隷下第 18・第 33 師団長に作戦構想を内示し両者に作戦実行の可否を打診　　・・**牟田口将軍にとって「インパール作戦構想」の初めての出会い!**

⑧第 18 師団長牟田口廉也中将の回答:「**作戦困難・実現の見込無し・不同意**」
　<理由>地形の問題・道路網の構築補修等の後方整備.補給体系の確立に準備不足
　<余談>「牟田口師団長の作戦困難の回答」の裏事情の風評　・・大田嘉弘著「インパール作戦」から
　　:牟田口師団長の飯田軍司令官に対する遺恨・縛があり
　　ⅰイ.ビルマ進攻作戦中　第 15 軍司令部(飯田軍司令官)が牟田口第 18 師団を追抜いた件
　　ロ.病床の牟田口師団長を飯田軍司令官が二回陣中見舞した件
　　等が牟田口師団長には督戦と映り自分の自尊心が傷つけられたとの感情
　　ⅱ「二十一号作戦」は**飯田軍司令官の発案・私案**と思い込む
　　上記ⅰ.ⅱが絡み合い「二十一号作戦に作戦困難・不同意」とぶっきらぼうに返答したとの由

⑨南太平洋ガダルカナル島での苦戦、他地域での戦況悪化により
　昭和 17/12/23　参謀本部「**二十一号作戦・保留**」決定・・中止ではなく飽くまでも保留
　　・・第 15 軍司令部では作戦計画・道路整備・補給等の諸問題の研究は続行
　　➡牟田口将軍の「インパール作戦」立案の素地

⑩昭和 18/3　　河辺正三中将　緬甸方面軍司令官赴任前東條英機首相兼陸相と面談
　　東條首相談「日本の対ビルマ政策は**対インド政策の先駆**に過ぎず　**重点目標はインド**であることを銘記されたい」

2.牟田口将軍の「二十一号作戦」対応の方向転換

①第18師団長時代:「**作戦に不同意・作戦困難**」

ⅰ「作戦」は飯田軍司令官の「発案・私案」と曲解

ⅱ飯田軍司令官に対する牟田口将軍の過去の経緯

②第15軍司令官就任(昭和13/8/13　第18師団長から昇任):「作戦遂行」

ⅰ「作戦」は**参謀本部の作戦指示と初めて認知**・・上位者には絶対服従の精神が喚起

ⅱ師団長時代の「作戦に不同意・作戦困難」の**消極的見解を後悔**　消極的見解=出来ない

<余談>牟田口将軍の「出来ない・絶対服従」の精神は?・・「責任なき戦場(NHK取材班)」から抜粋

「日本国内の組織では「出来ない」の論理は絶対許されず　**日本的組織第一主義の価値観**は現代の日本の政党.官僚.企業等にも蔓延している不変の価値観で、日本人はこの価値観を目一杯使ってこの国を興してきた　しかし諸外国から見ればとても不思議で或る意味では脅威感を与えているが、この価値観こそ日本の大きな特徴である」

ⅲ「作戦計画」は中止ではなく保留であって存続しており、「**作戦の遂行は天命**である」との認識

ⅳ盧溝橋事件の当事者で、日支事変(日中戦争).太平洋戦争まで発展させた**自責の念**

ⅴ「作戦」を遂行し太平洋戦争戦局打開を目指す・・自信過剰な本人の**功名心の発露**

ⅵ英軍ウィンゲート准将の「チンゲット作戦=長期挺進作戦」の攪乱により

イ.ビルマ防衛の攻勢防御の必要性を痛感

ロ.ビルマ.インド国境のアラカン山系は未踏の地ではない　との認識

3.日本人特有の人情・情実

①河辺正三緬甸方面軍司令官・・盧溝橋事件時支那駐屯軍旅団長で当時の牟田口連隊長の直属の上官

「余は**牟田口の心事を知る**　「**角を矯めて牛を殺す**」の愚は犯したくない　つまらぬ掣肘を加えず**思うようにやらせて成果を挙げさせたい**」と中方面軍参謀長.片倉高級参謀の作戦変更.修正の主張を却下

②寺内寿一南方軍総司令官

「**牟田口が信念を持ってやると言うなら思うように遣らせたら良いではないか**」と牟田口司令官の作戦計画を妄信・・上官の盲判.ノー天気

③杉山元参謀総長

「寺内さんの初めての要請で、たっての希望である　**南方軍で出来る範囲で遣らせたら良いではないか**」と真田第一部長(作戦部長)に同意を求める

4.作戦の認可

稲田正純南方軍総参謀副長.片倉衷方面軍高級参謀等の強硬な作戦反対.修正の異議も出るが

最終的には**日本人特有の人情論.情実**が勝って(**=軍事的合理性より人情論・組織内宥和が優先**)

昭和19/1/7　**参謀本部「インパール作戦」を認可**

「大陸指第1776号

大陸命650号ニ基キ左ノ如ク指示ス

南方軍総司令官ハ「ビルマ」防衛ノ為適時当面ノ敵ヲ撃破シテ

「インパール」付近東北部印度ノ要域ヲ占領確保スルコトヲ得」

昭和19年1月7日　参謀総長　杉山　元」

昭和19/3/8　作戦行動開始

Ⅳ.インパール作戦(昭和19)/牟田口廉也とノモンハン事件(昭和14)/辻政信・・旧日本陸軍の体質?

項目	インパール作戦/牟田口廉也	ノモンハン事件/辻政信
1.人脈.係属	<盧溝橋事件時(昭和12/7)の在籍> 15軍司令官牟田口廉也(支那駐屯軍歩兵連隊長) ・・事件の当事者 方面軍司令官河辺正三(支那駐屯軍旅団長) ・・牟田口の直属上官 **➡河辺.牟田口盧溝橋事件時のコンビ再現** 首相陸相東條英機(関東軍参謀長) ・・河辺とは陸軍大学校の同期 参謀総長　杉山元(陸軍大臣) ➡盧溝橋事件関係者の勢揃	<関東軍司令部のスタッフ(昭和14/4)> 軍司令官植田謙吉　(第一次上海事件時の師団長) 参謀長　磯谷廉介　(少中尉時代の第七連隊長) 主任参謀服部卓四郎(参謀本部時代の同僚) ・・同じ釜の飯を食った仲間の全員集合 「村(ムラ)社会」の組織
2.司令部	緬甸方面軍創設に伴い第15軍幕僚は方面軍に転属しビルマの現状を知るのは牟田口司令官只一人となり**独断専行発生の素因**	関東軍作戦課参謀の最古参で課内の主導権を掌握 ・・課内は下剋上の風調
3.独断.独裁	上級司令部(参謀本部.南方軍.方面軍)幕僚の指示.勧告.警告を無視 隷下三師団長を独断で解任	参謀本部の通告を無視し独断専行 ・・「辻軍司令官」の異名 戦場では師団長頭越に直接指揮する越権行為
4.敵戦力の先入観・軽視	マレー作戦.ビルマ攻略の体験から**英軍戦力を侮蔑**	ソ連軍戦力を日露戦争.シベリア出兵時代の戦力と軽視し　新生ソ連軍現戦力を過小評価
5.作戦のミス	兵站(軍装備.糧食)補給を無視	目先の戦術に終始し軍を逐次投入
6人情.情実	参謀総長杉山元:「寺内さん(南方軍総司令官)の初めての要望であり　たっての希望である」とインパール作戦にGo-Sign	陸相板垣征四郎:「一個師団の動員は現地軍に任せよ」と事件拡大を容認?

1.人脈・係属

①日本陸軍は日本固有の**タテ社会**の組織・・「軍閥」の存在

「軍閥」明治期:「陸の長州」(「海の薩摩.佐賀」)

昭和期:「統制派」「皇道派」

・・日本陸軍の「タテ社会の構造」は中根千枝東大名誉教授「タテ社会の人間関係」の典型的集団

<私見>陸軍は**Gemeinschaft**(地域.共同社会)=地縁.血縁等によって自然的.有機的に形成される社会集団

海軍は**Gesellschaft**(利益社会)=人為的な選択意志に基づき分離(利害.打算)を本質とする機能的集団で機能.合理.現実主義に徹し、人脈.係属形成の余地は無し

②良いも悪いも従前からの上下関係.人間関係を引き摺り、情実・忖度も絡む

③信賞必罰は上に甘く下には酷

上に甘い:インパール作戦後:河辺緬甸方面軍司令官は陸軍大将に昇進

:牟田口第15軍司令官は予備役編入後陸軍予科士官学校長に復帰

ノモンハン事件後:稲田参謀本部作戦課長.服部関東軍参謀.辻関東軍参謀等は名ばかりの左遷

<余談>真珠湾被爆後の米国は現地海陸軍最高指揮官を即刻冷酷にもバッサリと解任.降格の処分

④今日の日本社会(政界.財界.学界等)にも閥は存在:派閥・学閥・門閥・閨閥・財閥等

2.司令部

①緬甸方面軍創設に伴い第15軍司令部幕僚の殆どが方面軍に転出し、第15軍司令部新任幕僚はビルマ現状に疎く、現地の情勢を知るのは軍司令官牟田口中将只一人となり軍司令部は**軍司令官独断専行の場**と化す

②関東軍作戦課でも辻政信が課内最古参の参謀として課の主導権を掌握し「辻軍司令官」と揶揄される

<私見>ⅰ参謀人事(参謀本部庶務課の所轄)の弊害:「適材適所の人事を無視し機械的.順送り.ところてん式に発令した」と思料

ⅱ海軍人事でも適材適所の失敗例あり・・太平洋戦争直前の現場前線の艦隊長官の発令

イ.昭和16/4真珠湾攻撃直前に攻撃総指揮官に航空攻撃には畑違いで水雷畑の南雲忠一中将を発令

ロ.昭和16/8第四艦隊長官に艦隊勤務経験不足の井上成美中将を発令

・・序列・ハンモックナンバーの悪しき慣例の弊害

3.独断・独裁

①牟田口軍司令官の強烈までの**非妥協的.偏執的な個性**

ⅰ.上位者である参謀総長.南方軍総司令官.方面軍司令官には絶対服従・・上位志向者か

・・しかし上位者の方針.意向を自己流に拡大解釈.曲解し作戦を立案➡敗戦の因

ⅱ.上位司令部幕僚の指示.勧告.警告は無視

ⅲ.部下には自己作戦計画を強制

②辻関東軍参謀

参謀本部の通告を無視し、独断によるモンゴル領越境空爆は大権干犯で陸軍刑法に抵触

4.敵戦力の軽視・・両者とも過去の実戦体験の**先入観**

牟田口軍司令官はシンガポール攻略.ビルマ制圧時の英軍の遁走振りを目撃し**英軍戦力を侮蔑**

・・「敵と遭遇すれば銃口を空に向けて三発撃て　そうすれば**敵は降参する約束**ができている!」

作戦会議上で牟田口軍司令官の冗談とも取れぬ発言に列座の兵団長は耳を疑い座は一瞬白ける

<私見>ⅰ軍司令官の言動とは思えず笑い話にもならない何とお粗末な発想と思料

ⅱ牟田口軍司令官は孫子の兵法「**彼ヲ知ラズ己ヲ知ラザレバ戦ウ毎ニ必ズ殆シ**」を知らずか?

5.作戦のミス・・目先の勝利に執着

①ⅰ作戦立案当初から参謀本部.南方軍.方面軍司令部各参謀からの火力不足.兵站補給不足の指摘も牟田口司令官は**自己作戦計画に拘泥**

ⅱ糧食補給不足分:時代錯誤の「ジンギスカン戦法」を応用しインパール制圧後は「糧食を敵に求める現地調達」(英印軍の放置残留物資)で対応・・日本陸軍の特性=兵站より作戦優性の風潮

<参考>ジンギスカン戦法:牛馬を荷車用として帯同し、食料不足になれば牛馬を屠殺し食用とする

<私見>ⅰ兵站無視は前年のガダルカナル島敗戦の教訓を生かさず

・・「腹が減っては戦は出来ず」の故事、秀吉の「中国大返」の歴史事実を知らずか

ⅱ陸軍に限らず日本人は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」が如く、「失敗(敗戦)を負の財産として蓄積しない風潮がある」と　同じ失敗(敗戦)を繰り返す

②ノモンハン事件の関東軍作戦課は目先の戦術に終始し軍を逐次投入するミス

6.人情論・・戦争に情実・忖度を持ち込む

杉山元参謀総長「寺内さん(南方軍総司令官)の初めての要望であり　たっての希望である」と最終的に「インパール作戦」にGo Sign!

追　記

①参謀本部作戦課参謀瀬島龍三(元伊藤忠商事会長)中佐の回顧

「大本営は"やれ"という大陸命ではないが、"することが出来る"大陸指で認可

作戦は認可するが、**内心は不同意**　と現場に任せた」・・曖昧な意思決定で責任回避

<参考>大陸命:大元帥(天皇)の名で発せられた陸軍への作戦命令

大陸指:個別の指示で天皇に報告するだけで可

②東條英機首相兼陸相の「インパール作戦」に対する懸念

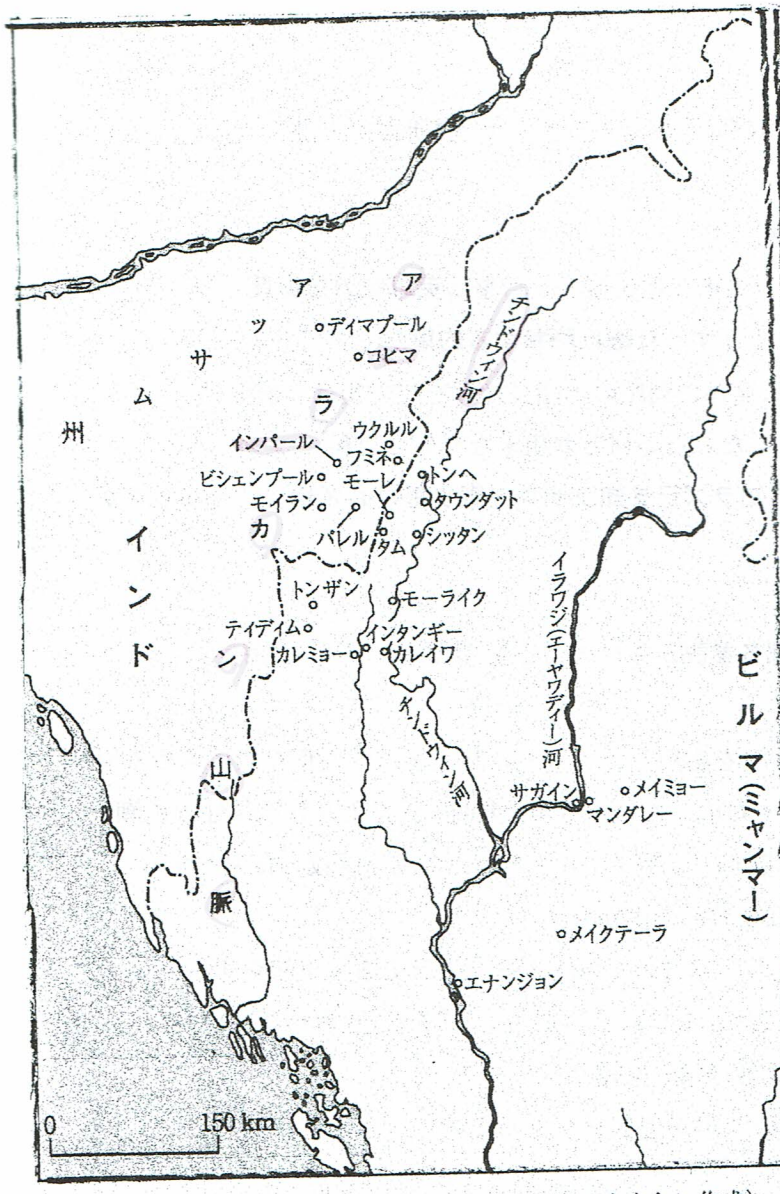
ⅰベンガル湾方面.南部ビルマ沿岸の英印軍反攻(特に作戦中)の対策は?

ⅱ作戦中の兵員増強対策は?

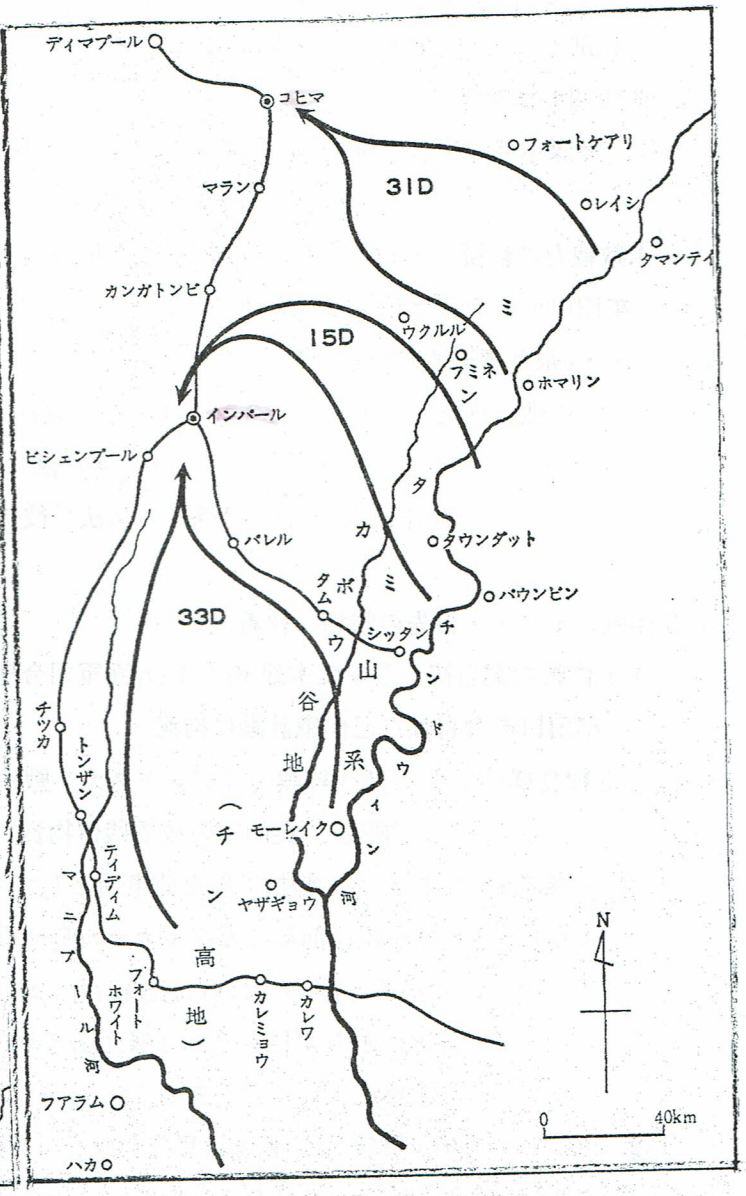
ⅲ劣勢な航空兵力は地上戦掩護を出来るか?

ⅳ補給対策は万全か?

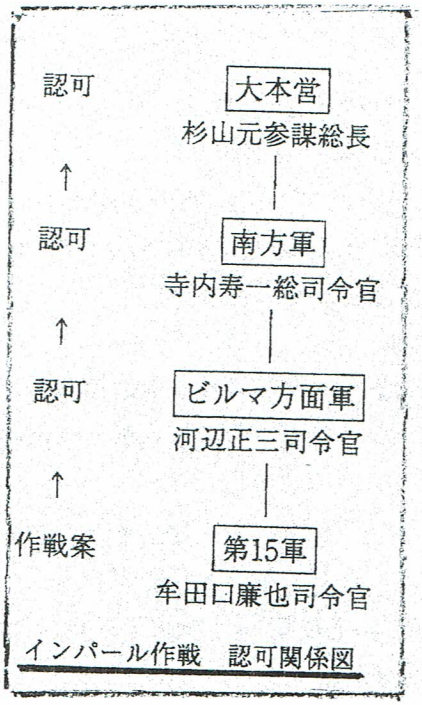
ⅴ第15軍の作戦構想は堅実か?



関連地図(『戦史叢書 インパール作戦』付図をもとに作成)



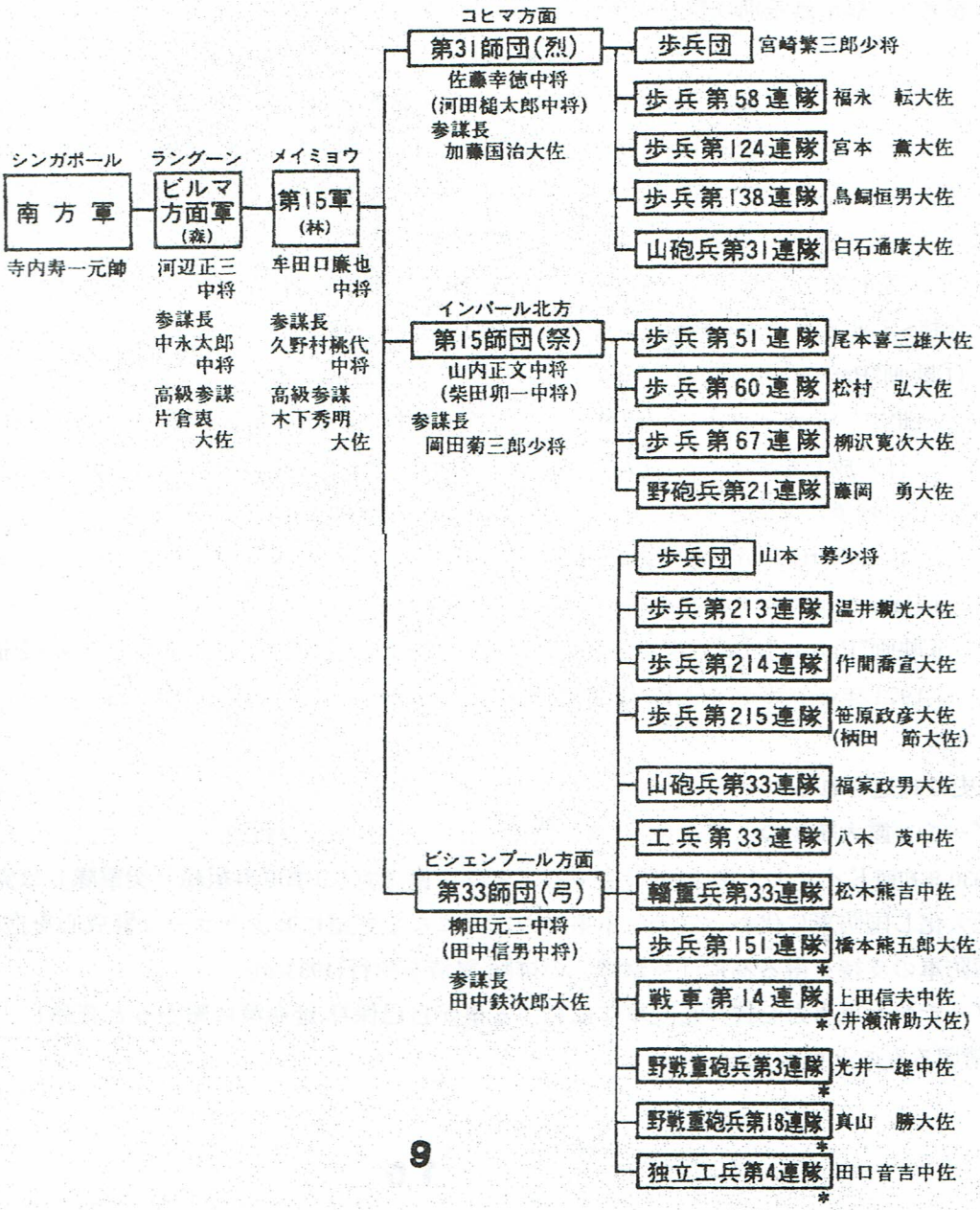
第15軍インパール作戦構想図



インパール作戦　認可関係図

インパール作戦時の日本軍編制

人名（　）は後任　（＊は配属部隊）



<番外編>　我の独り言!　「ロシアのウクライナ侵攻」　第二弾

1.ロシア軍のウクライナの首都キーウ攻略頓挫の要因・・所詮「**ロシア/プーチンの"Own Goal"!**」

①ｉプーチンはウクライナの軍・国民の戦意を軽視

ii　〃　　ウクライナ国民の「反露感情」を認識・理解出来ず

②戦術のミス:先制攻撃の未実施=陸軍侵略部隊進撃前に何故爆撃機.ミサイル等でウクライナ軍要地を空爆しなかったのか?

ｉロシア空軍の戦闘能力の低レベル

:機体の性能(ハード面)は高いが、パイロットの技能力(ソフト面)は未熟

ii ウクライナ軍の対空ミサイル等の防空体制を警戒し出撃を躊躇➡制空権を確保できず

iii ロシア軍上層部の官僚化

・・詰る所ロシア軍戦力は見掛倒で「張り子の虎」か

2.ロシア軍の戦術転換=戦車・歩兵戦術(陸上攻撃)➡ミサイル攻撃(空中攻撃)に方向転換

①その要因　戦車台数.戦闘要員の枯渇からミサイル攻撃に転換

②ミサイルの攻撃目標地点(住居用ビル)はピンポイント攻撃か?　無差別攻撃か?

ｉ我は現下のロシア軍にはピンポイント攻撃するだけの技術力は無いと推測し、現状のミサイル攻撃は闇雲の「**無差別攻撃**」と断定・・　**犠牲者は常に民間人**

<参考>「都市無差別攻撃」の例 1937/4　　スペイン内乱に於けるナチスドイツのゲルニカ爆撃

1938～43　日中戦争での*日本軍の重慶爆撃

*日本人は米軍の本土空襲の被害者意識は過剰にあるが日中戦争では重慶爆撃の加害者である事には不知

1945/2　　第二次大戦での連合国軍によるドイツドレスデン爆撃

1945　　米軍による本土空襲

ii 民間人を対象とした一連の無差別攻撃は、正に「**戦争犯罪**」であると強く弾劾するものである

<余談>ミサイル攻撃=無差別攻撃・・「顔の見えない戦争」

①映画"Patton"(邦画名「パットン大戦車軍団」の one-scene

:北アフリカ・カルタゴ遺跡での Patton の呟:「前回の戦争も今回の戦争も後方からの砲撃戦の打ち放しをするだけで人間=兵士の顔が見えない　戦争にも人間性が必要だ」

「戦争に人間性が必要」と Patton の口から出るとは噴飯ものであるが、

もし Patton が存命であれば今回のロシアの都市無差別攻撃には憤慨するであろうと我は思う

②ｉ Patton はカルタゴの英雄ハンニバルの崇拝者でハンニバルの再来者と自任

ii 映画"Patton"は陳腐な戦争映画に非ず　Patton の人間性(良しも悪しきも)を描写し、1971 年のアカデミー賞(作品.監督.主演男優.脚本.編集.美術)受賞作品

3.歴史は繰返される

①プーチン露大統領の「ワグネル(露民間軍事会社)の排除」の報道

ｉ 1930 年初頭ドイツナチ党(国家社会主義ドイツ労働者党)の準軍事組織「突撃隊」は党の勢力拡大に伴い肥大化し国防軍に代わって国の軍事力の主力になる野望にヒットラーは警戒心を抱き、最終的には国防軍の支持を得る為に「突撃隊」の排除.粛清を断行(1933/6)

ii プーチンも軍事力を持つ正規軍に依存する事が自己保身.延命策に繋がると認識し「ワグネル」の排除に踏切るものと推測する

②1938/9「ミュンヘン会談」の再現・・当事国(ウクライナ)を抜きにしての**大国間同士の妥協を危惧**

ⅰウクライナ問題解決の為には国際連合が機能していない現状では関係各国による国際和平会議開催が喫緊である

ⅱ会議参加国は当事国:イ.ウクライナとウクライナ支援国のNATO欧米諸国(米英仏独伊等諸国)

支援国の一員である日本の参加は?

・・日本も積極的に会議に参加し国際平和の確立、ウクライナの戦後復興支援等に寄与する絶好の機会の場であると思料する

ロ.ロシアと中国(ロシアの精神的支援国)

ⅲ最終的な解決策　:イ.ウクライナの**NATO加盟**

・・ロシアは拒否

ロ.ロシアの実効支配下にあるウクライナ領の**ロシアへの併合**

・・ウクライナは拒否

両国に言い分はあると思うが、国際会議では日本大岡裁きの「**三方一両損**」の「**互譲の精神**=『お互い損をしたと思う』」が必要

<私見>ウクライナにとって名(領土割譲)を棄て、実(NATO加盟)を取った方が長い眼で見れば得策か

ⅳ我が一番危惧するのは当事国ウクライナ抜きにして米露両大国間だけでの妥協である

之は正しく1938/9チェコズデーデン地方の帰属問題でヒットラー/ドイツが同地方の割譲要求に対しミュンヘン会談(当事国・主権国家であるチェコを除外し英仏独伊四ヵ国)で、英仏両国がヒットラーの威圧に屈し独の要求に同意した事の再現に他ならず

<余談>英仏の「宥和政策」は当時戦争回避と大歓迎されたが、結果的には第二次世界大戦の遠因となる

4.ロシアの敗戦（戦略的な敗戦 or プーチンの失脚)?による今後の国際情勢の進展

①ⅰロシアに西欧型民主主義国家が誕生

ⅱロシアのEU加盟

②新冷戦体制の終局に伴い

ⅰNATOのraison détreが消滅し機構は必然的に解体

ⅱワルシャワ条約機構の後身でロシア主体の集団安全保障条約機構(CSTU))も瓦解

③中国・ロシアの力関係が逆転・・中国=弟分➡兄貴　ロシア=兄貴➡弟分

ⅰ中国がロシアに取って代って米国の対極国家となる事が明白となる

ⅱ中央アジア諸国に対するロシアの威信.影響力の低下に伴い、その間隙を縫って中国が「一帯一路」策を梃に中央アジア諸国に急接近し勢力下に置く事を画策

➡**中国を盟主とする新集団安全保障条約機構=軍事同盟の設立**の可能性もあり

<参考文献>(順不同)

書　名	著　者	発行社
「失敗の本質」	戸部良一他	ダイヤモンド社(1984)
「責任なき戦場」	NHK 取材班	角川書店(1993)
「戦慄の記録　インパール」	NHK スペシャル取材班	岩波書店(2018)
「インパール作戦 ビルマ方面軍第 15 軍敗因の真相」	大田嘉弘	ジャパン.ミリタリー.レビュー(2008)
「インパール作戦　その体験と研究」	磯部卓男	磯部企画(1973)
「組織の不条理　日本軍の失敗に学ぶ」	菊澤研宗	中央公論新社(2017)
「日本の戦争指導におけるビルマ戦線 インパール作戦を中心に」	荒川憲一	防衛研究所(2003)
「インパール作戦 日本陸軍最後の大決戦」	土門周平	PHP 研究所(2005)
「イムーパル」	高木俊朗	雄鶏社 (1949)
「インパール作戦」	永原実	現代史講座(2022)
「日本陸軍によるインパール作戦構想立案の再考」	新福祐一	軍事史学第 58 巻第 2 号(2022)
Wikipedia		

<余談>　歴史学習に於ける古人の金言

1.「歴史とはただ学ぶに非ず　歴史から何を学ぶかが肝要である」　海軍大将　山梨勝之進(日本)

2.「歴史とは現代と過去との間にある　尽きぬことを知らぬ対話である」歴史政治学者　EH.カー(英国)

3.「愚者は経験にまなび賢者は歴史に学ぶ」　鉄血宰相　ビスマルク(ドイツ)

<PS>"Please send E-mail to me if you have any Questions!"

E-mail address:　hamadash1945@gmail.com